柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401・044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第189号

臼井義胤翁を訪ねて 10

臼井への関心

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

先祖への想い

大正4年（1915年）発行の『人事興信録』に富豪として名を遺した義胤翁は、著名人の1人として社会的に認知されたのです。この時翁は71歳。養子として迎えられた名門臼井家の名を再興する礎は築けたと、安堵の想いを抱いたのでしょう。その後も財力を生かした教育関係の寄付は怠らず、柿生村の尋常高等義胤小学校（以下義胤小学校と略記）に対しても、大正11年（1922年）に校舎増築費として5千円を提供しています。村に対しても、大正3年(1914年)に学童保護会に対して基本金として500円を寄付しています。

下麻生の臼井本家の玄関（戦時中）

一方で、下麻生の臼井本家の旧宅についても、手放した周辺の土地を含めて買戻しを進めると、第二夫人なみ女を母に持つ次男の公胤さんが結婚して独立する際に、この地に広い敷地を持つ邸宅を建て、別家を立てる公胤さんに贈与しています。公胤さんと八重子さん（須崎延太郎・マサ夫妻の長女）夫妻は、長女文子さん、長男元胤さん、次女和子さん、三女玉子さんの4人のお子さんに恵まれましたが、長男元胤さんは大正2年（1913年）に夭折したため、三人姉妹が両親に慈しまれて東京の私立女学校へ入学しています。長女の文子さんは山脇学院、次女の和子さんと三女の玉子さんは青山学院に進みました。私が知己を得た小林一夫氏は次女和子さんの長男です。和子さんは大正2年（1913年）生まれですから、12歳当時小田急線は開通前でした（昭和2年―1927年開通）。ですから下麻生から青山学院中等部に通学することは不可能です。姉の文子さんも次女の和子さんも三女の玉子さんも、皆麻布の祖父の家に預けられて卒業まで通学したのです。公胤さんの兄泰胤さんは既に亡くなっていますから、いまだ一家の主は義胤翁です。翁夫妻は孫たちを快く迎え入れ、山脇や青山へも教育資金を寄贈し続けたのです。

ところで、下麻生の臼井家の玄関は、義胤小学校の玄関と作りがそっくりです。これは建築を請け負った棟梁が、義胤小学校創立の最大の功労者の屋敷なのだからと、あえて同じ作りの玄関にしたからなのです。写真は籠口の池の正面にあった当時の臼井公胤家の正面玄関です。義胤小学校の玄関に良く似ていることが分かります。残念ながら下麻生の臼井家の建物と敷地は、近年売却され小区画に分割されて、分譲されたため、臼井本家の跡を示すものは、完全に失われてしまいました。

話を義胤翁に戻しましょう。義胤翁は大正時代の中頃になると臼井家のルーツを辿って、鎌倉殿に仕えた臼井六郎常康を祖とする臼井の地を頻繁に訪れるようになります。やがて翁は臼井家の菩提寺円応寺の近くに、臼井城跡を見上げる一帯を買い集め、その地を開発して広々とした平地や農地に替え、借り住まい出来る小庵を建てて、ここを拠点に臼井家の歴史を勉強するようになったのです。後北条氏に仕えた臼井家の一族は、秀吉軍に敗れて散り散りに逃れ、一部は下麻生の地に逃れて武器を置き、百姓として生きる道を選びました。義胤翁は、臼井家の菩提寺、円応寺の住職から臼井城滅亡後に、一族の1人臼井秀胤が編纂した『千葉臼井家譜』が、本人から寺に納められ大切に保存されてきたことを告げられ、手に取ります。この文書は、令和2年（2020年）に臼井八景・八ヶ寺めぐり実行委員会の皆様の手で読み解かれ、現代語訳が公刊されていますので、誰でも読むことが出来ます。義胤翁は天保年間の生まれですから、江戸文書を読む苦労はありません。ここで翁は、先祖に忠勤を尽くした岩戸胤安とおたつの存在を知り、2人の助けを得て成人して臼井家中興の祖となった臼井行胤（後興胤に改名）の業績を知ったのです。先祖の功績を後世に伝えたい、義胤翁はこう考えるようになりました。　（続く）